

# 原始仏教における涅槃

— nibbāna と parinibbāna —

藤 田 宏 達

はじめに

一九四七年にトーマス (E.J. Thomas) は "Nirvāṇa and Parinirvāṇa" という短い論文を書き、当時のヨーロッパの学界におおつて、parinirvāṇa を最終的な nirvāṇa すなわち死によつて到達される nirvāṇa と見る考え方が依然として広く行われていることを指摘し、parinirvāṇa は nirvāṇa と同じく現世で得られるもので、両語の間の実際上の区別はまったく文法的なものに過ぎない旨注意を喚起している。この見解は、その後の氏の著作にも認められるが、一九六九年にはノーマン (K.R. Norman) もリス・デヴィッス夫人 (C.A.F. Rlys Davids) が同じような誤解をしていることに触れ、トーマスの見解に同調している。<sup>(3)</sup>

一方、わが国における仏教の概説書や辞典等を見ると、必ずといってよいほど涅槃を取り上げているが、その中には nirvāṇa と parinirvāṇa の両語の関係については必ずしも

明確な記述がなされていないものがある。それは時として専門学者の論文における涅槃への言及の中にも見出される。涅槃の語は、仏教の究極の目的を表わす用語であるだけに、正確に理解されるべきことはいうまでもない。そこで、いまは原始仏教の範囲において、この両語をめぐつて涅槃がどのようにに説かれているか、若干の検討を試みることにしたい。

## 一 涅槃の原語

涅槃の原語といへば nibbana/nirvāṇa であることはいうまでもない。「涅槃」という漢語は、その推定中古音(カールグレンの表記によると *nieh-b'uan*) から見て、パリー語形に類似した俗語(たとえば、ガンダーラ語では *nirvāṇa*) を音写したものであること、古くは主に「泥洹」が用いられていることもよく知られている。インドの宗教・哲学において究極の目的を表わす語は「解脱」であり、すでに仏教以前から用いられているが、仏教は最初期よりこの「解脱」とともに「涅槃

槃」の語を採用した。原始経典の最古層と目される『スッタニパータ』第四章・第五章の詩句から *nibbana* (340, 1094, etc.) をその動詞形 *nibbāti* (915) が用いられている。

ところで、*nibbana* は通常 *nir-√va* に由来する中性名詞で「吹き消すこと」「吹き消した状態」を意味するとされるが、原始経典ではこうした語源的意味を積極的に示す用例は見当たらない。語根の *√va* (吹く) という意味を表出ししないで、単に「消えること」「消滅」の意味で用い、特に火または火に譬えられるものの消滅をさすことが多い。たとえば「灯火の消滅」(*nibbana*) の *√va* の心の解脱 (*vimokkha*) があった (DN. II, p. 157G; SN. I, p. 159G, etc.) ところで、それは解脱の境地に譬えられ、さらに解脱そのものを表わす用語となったのである。したがって、一般に涅槃の原義を「煩惱の火を吹き消すこと」と説明しているが、しかし実際には「吹く」という意味はなく、これをたとえば蠟燭の火を吹き消すようなイメージで解するのは不適当といわねばならない。漢訳でも *nibbana* を意識する場合には「滅」「寂滅」「滅度」などを当てており、「吹く」という意味はまったく示していない。したがって、それは同じく解脱を表わす *nirodha* (止滅) の訳語と共通している。

*nibbana* と語形が似ており、ほぼ同義的に使われる語として *nibbati* (Skt. *nirvāti*) があり、これも最古層の詩句 (Sn.

917, 938) から現われる。ただ原始経典全体としては、同じく最古層の詩句 (Sn. 1041) から、その過去分詞形 *nibbuta* (Skt. *nirvṛta*) のほうが多く出てくる。いずれも *nir-√vā* に由来し、もとは「覆いをとりさること」「(ときほ)ちれた状態」を意味するとされるが、ただ原始経典にはこのような語源的意味で使われる用例は見出されない。やはり語根の *√vā* (覆う) という意味を表出ししないで、単に「消滅」を意味する点では、*nibbana* と同じ事情にある。特に *nibbuta* は動詞 *nibbāti* の過去分詞のごとくに使われており、漢訳でも「涅槃」の語を当てることが少なくない。

ところで、こうした涅槃の原語は、もちろん仏教独自の用語ではない。ジャイナ教の古層経典を見ると、*nirvāṇa*, *nirvāda*, *nirvṛti* が同じように解脱の意味で用いられている。その際、語根の *√vā* あるいは *√vā* の意味を表出した例がほとんど見当たらないのも原始仏典と同じである。『スーヤガダ』には「涅槃は最高であるとブツダたちは「説く」 (*nirvāṇam paramam buddha*) (I. 11. 22) という句があるが、これは『ダンマパダ』で「涅槃は最高であるとブツダたちは説く」 (*nibbānam paramam vadanti buddha*) (184) という句と同じ表現であり、ジャイナ教と仏教とが同じように涅槃の語を重視していたことが知られる。

他方、バラモン教文献を見ると、*nir-√vā* に由来する語

は古く『リグ・ヴェーダ』(X. 16. 13) 以来使われているが、しかし仏教以前のウパニシヤツには *nirvāṇa* が解脱を表わす術語として成立していた形跡はない。この語が解脱の意味で明確に用いられるようになるのは『マハーバーラタ』になってからである。特に、その第六卷の一部分をなす『バガヴァッド・ギーター』には *nirvāṇa* が単独または合成語として五回 (II. 72; V. 24-26; VI. 15) も出てくることはよく知られている。『マハーバーラタ』には、このほか *nirvīta*, *nirvīti* が同じように解脱の境地を表わすものとして用いられている。

こうしてみると、涅槃は決して仏教特有の用語ではなく、仏教やジャイナ教が興起したころから、沙門たちを中心としたインド思想界でよく用いられていた用語であることが知られる。実際、原始経典の中にも、仏教以外の一般の涅槃説 (DN. I, pp. 36-8, etc.) が取り上げられている。もともと、現存の文献による限り、涅槃という用語を最も高揚したのは仏教であったと思われる。おそらくこの語が仏教の解脱の境地を表わすのに一番ふさわしいと見なされたことによるのであろう。

## 二 般涅槃の原語

原始経典においては、上述の涅槃の原語と相並んで、漢訳

原始仏教における涅槃 (藤 田)

でふつう「般涅槃」と訳される *parinibbāna* (Skt. *parinirvāṇa*) や *parinibbuta* (Skt. *parinirvīta*) も頻繁に使われる。『スッタニパータ』の上でみると、*parinibbāna* 及びその動詞形 *parinibbati* は第三章の詩句 (514, 591, 765) に、*parinibbuta* は第二・第三章の詩句 (346, 359, 370, 467, 735, 737, 739, 738) に用いられ、最古層と目される第四・第五章には現われないけれども、これに比べて *nibbāna*, *nibbuta* より遅れて用いられるようになったと言ひ難い。これは *parinibbuta* とほぼ同じ用法を示す *abhinibbuta* (Skt. *abhinirvīta*) が第二・第三章のみならず、第四・第五章の詩句 (783, 1087) に出る点から見て推定しようといふのである。おそらく、*nibbāna*, *nibbuta* と同様に、最初期の仏教から採用したものであろう。

ジャイナ教の古層経典を見ても、*parinivvāṇa* や *parinivvūda* (or *parinivvūda*) の語が解脱を表わすものとして用いられている。また *abhinivvūda* が用いられている点も、原始仏典の場合と同じである。他方、『マハーバーラタ』を見ると、*nirvāṇa*, *nirvīta* のようにには多くの用例はないようであるが、たとえば解脱を表わすのに *parinivvāmi* (XII. 171. 50) という語を用いている例から見て、やはり同じように取り扱われていたと考えてよいであらう。

このように、*parinibbāna*, *parinibbuta* の用法は *nibbāna*,

nibbata とほとんど同じであるが、ただこれらは pari- (完全に、遍く) という接頭辞を付した語で、字義どおりには「完全な涅槃」を意味するところから、一般には最終的な涅槃、すなわち解脱者の死を表わす語と見られている。しかし、前記トーマスが注意を喚起しているように、*nibbana, nibbata* とまったく同義で使われることが多いのも事実である。そこで、この点について少し具体的に検討してみよう。

周知のように、涅槃はこの世において得られるとするのが仏教の基本的立場である。これはブッダが成道時に涅槃に達したことで明らかであるが、原始経典においては、たとえは「現世におろつて涅槃を得る」(*papūnatū ditthe va dhamme nibbanam*) (*Ud.* p. 37; *AN.* IV, p. 353) とか、涅槃が「現に見られるもの」(*sanditthika*) (*AN.* I, p. 158; IV, p. 453) であるというように、涅槃が現世に関するものであることを明確に述べている。ジャイナ教の古層聖典における *nivvāna* (及び *parinivvāna*) 等の用例を見ても、現世に関して述べられる点<sup>(54)</sup> は同じである。いわゆる六十二見としてまとめられている異端の見解の中には、五種の「現法涅槃論」(*dīṭṭhadhammanibbāna-vāda*) が立てられており、涅槃がこの世で獲得されるべきものであることは、むしろ当時の思想界における共通の理解であったというべきである。

したがって、原始経典における *parinibbāna, parinibbata*

の用例を見ても、現世に関わるものとして述べられることが多い。前記の『スッタニパータ』の場合を見ると、「サビヤよ、自ら作った道によつて、般涅槃に達し、(*parinibbanagata*)、疑いを越え……」(514) という場合の *parinibbāna* は *nibbāna* とまったく同義である。これは註釈書 (*SzA.* p. 425) を見てもそうであり、『マナーヴァस्ता』(III, p. 395) の対応句では *abhinivvāgata* としている。あるいは「智慧広大にして、流れを渡り、彼岸に達し、般涅槃し、(*parinibbata*)、自ら安住してゐる牟尼にわたしはお尋ねします」(359) という場合の *parinibbata* が *nibbata* と何ら変わらなうとも明白である。後に触れる一詩句を除く、他の詩句(370, 467, 735, 737, 739, 758) における用法もすべて同じである。また『タンマパダ』には「漏尽にして光輝あるかれらは、世間において般涅槃している (*te loke parinibbutā*)」(89) とあって、表現の上でも現世の趣意は明瞭である。類似の表現は、他の経典に「かれはその法を、この世で、<sup>(55)</sup> 知し、無漏なる者として、般涅槃する (*idh' añhaya parinibbutū anasavo*)」(*AN.* III, pp. 41G, 43G, etc.) とある詩句にもうかがわれる。このほか、詩句の中には現法涅槃の意味を示す *parinibbata* の用例を数多く見出すことができる。

そして、このような用法は散文の部分でもまったく同じである。たとえば「現世において般涅槃する」(*dīṭṭhe va dham-*

me parinibbāyati) (DN. III, p. 97; SN. IV, p. 102; AN. I, p. 204, etc.) とする表現がよく用いられ、その「むたくしは……現世におごつ (ditthe va dhamme) 欲望なく、涅槃を得 (nibbuta) 清凉となり、無取著般涅槃 (anupāde-parinibbāna) を知らしめる」(AN. V, p. 65) とゆう。あるいは「恐れることなく自ら般涅槃」(pacattañ eva parinibbāyati) へ生はずでに尽きた。梵行はすでに完成した。なすべきことをなし終えた。さらにかかる状態に至ることはなほくと知る」(DN. II, p. 68; MN. I, p. 67, etc.) とゆう文が型のごとく説かれるのも、現法涅槃の意を示している。ブツダの説法について「かの世尊は【自ら】般涅槃、つづ (parinibbuta) 【他の】般涅槃 (parinibbāna) のために法を説く」(DN. III, p. 55; MN. I, p. 235) とする場合の parinibbuta, parinibbāna が現世のそれをおこしていることも明白である。ゆえに「ブツダをおこつていまだ般涅槃しなう者たちを般涅槃せしめる者」(aparinibbutānaṃ parinibbāpetā) (MN. II, p. 102) とゆう。ことにリス・デューヒンス (T. W. Rhys Davids) が指摘しているように、parinibbāyati, parinibbuta とする語は「生きつゝいる馬が「完全に静まる (＝かく調教される)」(MN. I, p. 446) の意味で用いられる語でもあるから、在世中のブツダを形容する語として用いられるのに問題があるはずもなう。

ちなみに「abhinibbuta」という語は「最古層の詩句 (Sn.

1087) や ditthadhammabhinibbuta とする *dhā* と「現世」の語と合成して用いられている。この語は前記のように parinibbuta とはほ同じ意味を表わすものであるから、この点でも原始仏教における現法涅槃の用法が古くから確立していたと見る事ができよう。

### 三 涅槃と死

しかるに、原始経典においては、以上にあげた涅槃もしくは般涅槃に相当する原語が、他方この世で涅槃を得た者すなわち解脱者の死を表わすものとして用いられている。これは、いわゆる最古層の詩句には認められないものの、比較的古い詩句から現われるから、かなり早くからの用法と見てよい。『スッタニパータ』を見ると、第二章の中の二つの詩句にこの用法が見出される。一つは「古い【業】はすでに尽き、新しい【業】は生ずることはない。……賢者たちはこの灯火のように涅槃に入る (nibbantī)」(235 = Kp. 6, 14) という句で、この場合の nibbantī は、文脈の上からいって、また後の註釈書 (KpA. pp. 194-5) でも「解脱者たちの死を意味している。もう一つの詩句は「智慧ゆたかな方よ、【かれは】般涅槃した (parinibbuta) のか、教えてください」(346 = Thag. 1266) とある場合で、これはヴァンギーサ比丘がその師ニグローダ・カンパ長老の死について問うたものであ

り、このことは前文の散文箇所、同じく parinibbuta をもつてこの長老の死の状況を語っていることで明らかである。先に現世的な用法の parinibbuta について「一詩句を除いて」と記したのは、この詩句のことである。

『スッタニパータ』の詩句では、右の二例のみであるが、『テラガーター』を見ると、もっと多くの用例が見出される。たとえば「わたしは生命尽きて、(jivitasamkharā) 竹叢の下で無漏なる者として涅槃に入るであらう、(nibbāyissam)」(919)、「かれら長老たちは、いまは涅槃に入ってしまった、(nibbuta dam)」(928)、「ナーガ(仏)は身体を捨てて、(sarrāṃ vijāham) 無漏なる者として般涅槃するであらう、(parinibbissati)」(704)、「心の安住したかくのとき人(仏)には、すでに呼吸がなく、(nāhu assasapassāso) ……般涅槃された、(parinibbuto)」(906)とあり、文脈上死を意味することは明瞭である。

これらの例では、解脱を得た者の死を表わすのに、涅槃と般涅槃の両方が用いられているが、しかしそのほかの用例をあわせてみると、全体としては般涅槃に当たる語を多く用いる傾向が認められる。そして、散文経典になると、その傾向が一層強くなり、ブツダの死を語る『大般涅槃経』(Mahāparinibbāna-sūtra)も成立したことは周知のとおりである。

どうして nibbāna よりも parinibbāna のほうが用いられる

ようになったのか。前記トーマスによると、両語の区別はまったく文法的なもので、nibbāna が「涅槃の状態」を表わすのに対して、これに pari- を付すと「涅槃の状態へ到達すること」を表わすという。この解釈はノーマンも是認しているが、いま一つ釈然としない。むしろ、parinibbāna が字義どおりには「完全な涅槃」の意であるところから、死に擬する表現としては、nibbāna よりも適切と考えられたのではなからうか。

ところで、本来この世で獲得されるべき涅槃(または般涅槃)がなぜ死と結びつけられるにいたったのか。この点については、まず nibbāna (あるいは nibbuta) という語が元来「消滅」を意味することを指摘できよう。それは、火または火に譬えられる煩惱の消滅をさすが、広い意味では煩惱をもつ人間存在全体の消滅にも適用される語であったといえる。

しかも、当時一般の輪廻・業の思想からみると、涅槃の境地は輪廻からの解脱を意味するわけであるが、たといこの世で涅槃に達したとしても、なお前世の業の果報としての身体は消滅していないから、真の意味の「消滅」が、身体の消滅すなわち死において実現されると見るようになるのはむしろ自然である。仏教前後のウパニシャッドの解脱観を見ても、現世において梵我一如の解脱を得ることが説かれるもの、やはり真の解脱は死後に達成されると考えられていた。また、

ジャイナ教でも、仏教と同じように「完全な涅槃」を表わす語が現世と死後とのいずれにも用いられていること、またジャイナ教の苦行の究極が断食死であり、完全な解脱は身体の死をもって実現されるという考え方にあったと見られる。してみると、仏教における涅槃が現世のそればかりでなく、死と結びつけて考えられるようになったのは、やはり当時の思想界一般の動向に対応したものでできよう。原始経典では涅槃の同義語としてしばしば「不死」(amata, Skt. amīṣa)をあげているが、これは『リグ・ヴェーダ』以来、理想的・絶対的な境界に対して与えられたインド一般の表現に從ったもので、死の単なる否定ではないから、涅槃と死とを結びつける考え方と抵触するものではない。

このように、涅槃に死の意義が付与され、それを主に般涅槃で表わすようになったが、しかしこの語はもともと涅槃と同様にこの世における解脱を表わすものであり、実際その用法も失われたわけではない。したがって、原始経典では般涅槃の語を現世のそれと見るか、死後のそれと見るか判断がつきかねる場合もある。たとえば『スタタニパータ』には「その〔涅槃の〕境地を正しく了知して、無漏なる者たちは般涅槃する (parinibhanti anasava) (765=SN, IV, p. 128G) という句があるが、この場合の般涅槃は現世とも死後とも、どちらにも解することができる。事実、後代の註釈書(SzA, p. 510)

原始仏教における涅槃(藤田)

でも、この二様の解釈を認めている。この “parinibhanti anasava” という句は『ダンマパダ』(126)にも出てくるが、そこでも二様の解説が可能である。そのほか、これと同類の句は『テラガーター』等の詩句に頻出するが、やはり現世か死後かの区別をはっきり知り得ない場合が多い。こうした点からみると、nibbana が生前の解脱で、parinibbana が解脱者の死をさすという用法は、原始仏教の範囲ではまだ確立していなかったといわねばならない。

#### 四 二種涅槃界

以上のような涅槃と死とをめぐって、やがて原始仏教のおそらく最終段階において、新たな説が生まれた。それは、『イティヴッタカ』(p. 38)及び相当漢訳のみに説かれる「有余涅槃界」(saupadisesa nibbana)と「無余涅槃界」(anupadisesa nibbana)という二種の涅槃界説である。両者の区別をなす有余・無余という漢訳(旧訳)の「余」は upadisesa に当たるが、この語は難解であって、正確な意味を確定しにくい。パーリでは upadi- は sesa (残余)と合成してのみ用いられる語で、語源的には upa-a-√da (取る)に由来し、upadana と同く、もとは取著という意味に解するのが妥当と思われるが、しかしいまこの意味をそのままにとると、「有余涅槃界」は「取著の残余のある涅槃界」となって、

涅槃の概念に自家撞着をきたすことになる。涅槃とは取著（煩惱）を残りにくく消滅したものだからである。したがって、この場合の *upādīśesa* はこのような意味ではなく、後の註釈書 (*MA. I, p. 165*) が解するよう「五蘊の残余」の意味にとらなければならぬ。ただし *upādi-* が「五蘊」の意を含むにいたる経緯は原始經典の上では明瞭に跡づけられない。もっとも、最古層の詩句 (*Sn. 876*) に *anupādīśesa* の語が一度使われ、これを註釈書 (*MNZ. p. 282; SnA. p. 553*) のように断滅論者の立場を表示する語と見るならば、「五蘊の残余がないこと」すなわち身心の消滅の意味に解さねばならぬから、この用法は相当古くからあったのかもしれない。サンスクリット文献では、有余・無余を *sopādīśesa*, *anupādīśesa* (or *nirupādīśesa*) で表わしてゐるが、これはパーリの *upādi* の代わりに *upadhi* を用いている点が異なっている。*upadhi* という語も難解であるが、基本的には「依り所」(漢訳は「依」)の意を示す語であるから、*upādīśesa* は「生存の依り所」としての身心の残余という身体的意味をより濃厚に示した表現といつてよい。漢訳(新訳)でもその有無を「有余依」「無余依」と訳している。いずれにせよ、このように有余・無余は身心の有無を意味するから、有余涅槃界はこの世において煩惱を断じて涅槃を得ているが、なお身体を保っている間の境界をさすのに対し、無依涅槃界は煩惱も身体も

まったく消滅した死時もしくは死後の涅槃の境界をさすのである。

ところで、この二種涅槃界説が成立した背景には、この世で涅槃に達した解脱者の死後のあり方に対する強い関心があったと考えられる。周知のように、ブッダは如来が死後に存在するか、存在しないかという形而上学の問題については「無記」の立場をとり、論議することを避けた。解脱者の死後のあり方について完全な沈黙を守ることは、すでに最古層の詩句 (*Sn. 1076*) に現われている。散文經典を見ると、たとえばヤマカ比丘は「解脱した比丘が死後に存在することはない」旨を述べたとき、比丘たちより「悪い見解」であると批判され、さらにサーリプッタより「この現世では、真に、確かに如来は認知されることだが、*na* (anupalabbhīyamaṇa)」と教示されて、この悪見を断じた (*SN. III, pp. 109-112*) という。これは、解脱者もしくは如来の死後のあり方は知ることができないものであり、したがって死後に存在しないというような断定もできないことを示したものである。同様な考え方は、如来の死後について無記を説く理由として、あたかも大海のように「如来は深遠、*(gambhīra)*、無量、*(appameyya)*、測り難、*(duppariyogha)*」(*SN. IV, pp. 376-9; MN. I, pp. 487-8*) と述べていることにもうかがわれる。如来の死後の問題はわれわれの認識を超越したものとされるのであ

る。

このように、如来によって代表される解脱者の死後のあり方については、いずれとも断定していないが、ただこうした記述を見ると、当時すでに解脱者の死後に対しても未解脱者のそれに対するのと同じような関心が寄せられていたことがうかがわれる。ヴァツカリ比丘やゴデーカ比丘が自殺したとき、かれらは死後ブツダより同じように「識」(vīṇana)がとどまることなく、般涅槃した(Parinibbata)。(SN. I, p. 122; III, p. 124)といわれているが、この場合の「識」(漢訳では「識神」または「神識」)はほぼ靈魂に相当するもので、このブツダの所説は悪魔が登場して、かれら二人の比丘の靈魂(識)の行方を探しているのに対して答えたものである。「識がとどまることなく」とあるのは、二人とも解脱を得たと認定したために、あえて行方不明のような形で断定を避けたものと思われるが、ともかく解脱者に対しても、このように靈魂の行方を求めるところに、当時の一般の人々の関心の所在が推知される。如来の死後の有無の問題が「十難無記」(ないし「十四難無記」)に数えられたのも、解脱者の死後のあり方についての一一般の関心の深さを裏づけるものといつてよい。

こうした関心に対する一種の積極的な解答として説かれたのが無余涅槃界であったように思われる。二種涅槃界のうちでこれだけが「無余涅槃界に般涅槃する」という定型句をも

って、単独にしばしば説かれており、有余涅槃界よりも先に成立していたことを示唆している。この定型句は『大般涅槃經』(DN. II, pp. 108-9, 134, 136, 140-1)に多く見出されるので、まずブツダの死について説かれ、ついで解脱者一般(Vin. II, p. 239; AN. IV, p. 202; Ud. p. 55, etc.)にも用いられたものである。この場合、注意すべきは、必ず涅槃に dhātu (界)の語をともなっていることである。この語は多義的であるが、ここでは境界・境地・領域というほどの意味で、涅槃を得た者の死後の境界を具体的に・積極的に表わしたものと見てよい<sup>(28)</sup>。そして「無余涅槃界に般涅槃する」という場合の「般涅槃」(Parinibbayaṇi, parinibbata)が死の意味で使われていることも明らかである。

無余涅槃界の觀念がこのようにして成立したとすると、しからばこれに対して生前に涅槃を得た者をいかに表わすべきかという問題が生ずる理で、ここに「有余涅槃界」という用語が無余涅槃界という語との対比で説かれるにいたったものと思われる。ただし、この場合の「有余」の語は依然として問題を含んでいる。それは前述のように身心の残余を有するという意味であるが、しかし他方やはり取著の残余を有するということの意味も失われていないからである。たとえば、先にも触れたが、ヴァンギーサ比丘は、自分の師ニグローダ・カッパ長老が死んだとき、その場に居合わせなかつたので、師が

果たして解脱者として死んだ (parinibbata) のか否かについて疑念を生じ、ブツダに「かれは涅槃を得た (nibbāyī) のでしょうか。それとも取著の残余がある (saupādisesa 有余) のでしょうか。どのように解脱したのか、それをわたしたちは聞きたいのです」(Sn. 354=Thag. 1274)と問うている。この場合の有余は涅槃（無余涅槃界に相当）に相對立する用語で、生前に涅槃を得ていなかったことを表わしているから、有余涅槃界の有余とは意味を異にしていることが明らかである。

それでは、もし生前に涅槃を得ることなく死を迎えたとしたら、死後の境界はどうなるのだろうか。断ずべき取著を残したとはいえ、涅槃に向かつて修行したその効果はまったく無に帰してしまふのであるうか。もとよりそうではなぐ。この点について、原始經典は、修行に専心するならば「二つの果報のうちどれか一つの果報が期待される。すなわち、現世における証悟 (ditthi va dhamme añña) か、あるいは取著の残余 (upādisesa) があるならば、【この世に】帰らなぐこと (āgāmiṃa 不還) じめ」(Sn. p. 140; DN. II, p. 314, etc.)とせう。「現世における証悟」とは、ちようど有余涅槃界に相当するのに對して、もしそれがかなわず「取著の残余」がある場合でも、死後には再びこの世には帰らず、現世での修行の効果は決して無駄とはならない、という趣旨である。「この世に」帰らないこと」とせうのは、不還が四沙門果の

第三果として定まる以前の表現と思われるが、ここには第三果としての不還に「かしこにおいて般涅槃する者」(caṭṭha parinibbāyī)と説かれるやうになつた觀念がすでに含まれていると見てよい。換言すれば、たといこの世で涅槃を得ることができなくても、修行の効果によつて、死後天界に生まれ、そこで最終的に涅槃に達することができるとされるのである。これは、涅槃と死との結びつきが、解脱者についてはかりでなく、未解脱者についても広く考えられていたことを示しているのである。<sup>(5)</sup>

1 *India Antiqua*: A Volume of Oriental Studies Presented by His Friends and Pupils to J. Ph. Vogel, Leiden, 1947, pp. 294-5.

2 E. J. Thomas, *The History of Buddhist Thought*, 2nd ed., London, 1951, p. 121, n. 4.

3 K. R. Norman, *The Elders' Verses I*, London, 1969, pp. 119-120.

4 「原始仏教」の用語については、拙稿「原始仏教・初期仏教・根本仏教」『印度哲学仏教学』第二号、一九八七年、二〇—五六頁)参照。

5 このほか nirvanasa じふら形も一回あげられてゐる。J. Brough, *The Gandhari Dharmapada*, London, 1962, p. 302.

6 nibbāna の語義を含む用法に関する近年の研究としては、中



原始佛教における涅槃(藤田)

704) が文脈上明瞭な句もある。

24 『本事経』卷三(大正藏)一七卷、六七七頁上—六七八頁上) なお、同じく相当経とされる『增壹阿含経』卷七(『大正藏』二卷、五七九頁上)は「有余涅槃界」に不還果を、「無余涅槃界」に阿羅漢果を配したもので、異系統の説である。

25 Cf. *PTSD*, s.v. *upādi*; *CPD*, s.v. *upādi-sesa*. 主な異説をあげると A. O. Lovejoy は *upādisesa* を「取著の残余」の意とする(“The Buddhistic Technical Terms *upādāna* and *upādisesa*,” *JAOS*, XIX, 1898, pp. 126-136.)。しかし Bhikhu Nānamoli は *upādisesa* が「毒害の残余」を意味する用語として用いた例(*MN*, II, pp. 257-9)から見て、*upādi* は医学用語ではなかつたかと推定する(*Minor Readings and Illustrations*, London, 1960, p. 214, n. 50)。他方 K. Bhattacharya は *upādi* の原義が「引き受けられたもの、引き受けられるもの」であるとする[「五】蘊】をよつとる (“*upādi*,” *upādi* et *upādāna* dans le Canon bouddhique pali,” *Mélanges d’Indianisme, a la mémoire de L. Renou*, Paris, 1968, p. 92; *L’Ānman-brāhman dans le Bouddhisme ancien*, Paris, 1973, p. 111)。

26 この詩句の読解には異説がある。註釈書に基づいた最近の訳としては、中村元訳『ソッタのことは』一九八四年、一九三頁、村上真完・及川真介共訳(『仏のことは註』)一九八八年、七三—七四頁) H. Saddhatissa 訳(*The Sutta-Nipāta*, London, 1985, p. 103) 参照。

27 *upādi* は「ホーリーでも」生存の依り所」の意味で使われる

が (cf. *PTSD*, *CPD*, s.v. *upādi*)。しかし二種涅槃界説にはこの語を用いない。

28 宮本正尊(北海道)「原始仏教における悟りの問題」(『日仏年報』第四十四号、一九七九年、三七—八頁) 参照。

29 拙稿「四沙門果の成立について」(『印仏研』七二、一九五九年、六九—七八頁)。

30 未解脱者のうち、在家者の得果については、四沙門果が成立してからは第三果までに限られることになったが、しかし在家者であっても涅槃に達し得るといのが仏教本来の考え方であったと思われる。拙稿「在家阿羅漢論」(『結城教授頌壽記念仏教思想史論集』大蔵出版、一九六四年、五一—七三頁) 参照。

〔補注〕涅槃に関する主要な学説については、宮本正尊「解脱と涅槃の研究——近代世界学者の研究を評釈して——」(早稲田大学大学院『文学研究科紀要』第六輯、一九六〇年、一一—四一頁)、『仏教学の根本問題』春秋社、一九八五年、三六—四二〇頁に収録) G. R. Welton, *The Buddhist Nirvāna and Its Western Interpreters*, Chicago, 1968 に紹介されている。後書に対しては J. W. de Jong の書評 (*JIP*, I, 1972, pp. 396-403, 平川彰訳『ドゥ・ヨング 仏教研究の歴史』春秋社、一九七五年、一四九—一五九頁) 参照。

〈キーワード〉原始仏教、涅槃、般涅槃、*nibbāna*, *parinibbāna* (北海道大学教授・文博)